

(2. 特集 行く・読む・感じる)

2-8. 関学レインボーウィークの二面性を越えて

飯塚 諒

関西学院大学では多様な性のあり方の理解を深めるイベントとして、「関学レインボーウィーク」を2013年から毎年、人権教育研究室のもとで開催している。

マイノリティの問題とは特に、マジョリティ側¹⁾のとりまく社会的な問題であるという観点から、レインボーウィークのイベントは性的マイノリティ当事者のみを対象とするものではなく、マジョリティ側への意識の向上、設備改善なども含め取り組んでいる。

筆者は、第二回(2014年)から、活動に携わっており、回数を重ねるごとに、イベントの量も増えてきている。

プログラムでは、性的マイノリティ当事者が授業やキャンパスライフにおいて、属性(セクシュアリティ)における揶揄をはじめとするハラスメントが常態化していることを問題とし、「キャンパス全体の風土を変える」ことが目指されてきた(阿部 2014)。そのため、イベントでは、パネル展、映画鑑賞、オープニングイベント、講演会など行っている(小林・飯塚・武田・北山 2016)。

その一方で、運営に携わる当事者を中心に、“当事者を対象としているという視点”が不足しているという問題提起がなされている。例えば、パンフレットの作り方をはじめ、「マジョリティ対象」の比重が大きすぎる、特に、キャンパスにおいて当事者でクローゼット²⁾や埋没³⁾の人もいる中⁴⁾で、このイベント自体をどのように受け取ればいいのかについて、プログラムを組み立てるうえで、議論が足りていないのではないかというものである。

加えて、レインボーカラーのステッカー⁵⁾(阿部 2015)についても、「LGBTをはじめとする性的マイノリティを支持する⁶⁾」という表明のような役割を持たせることが狙いで配布しているのだが、当事者にとっては意味合いが異なるのではないかと提起されている。当事者性が

1) マイノリティとマジョリティという二分も、文脈によって異なるが、ここでは性的マイノリティとされるものとそれ以外というわけ方をしている。

2) 自分のセクシュアリティを公にしない立場のこと。

3) トランスジェンダーに関わる用語で、自分の生活したい性にすでに適応(パス)しており、トランスジェンダーであることを明かさないこと。

4) 例えば、2015年に行ったweb調査では、「あなたは(関学内で)、LGBT当事者以外の人に何人カミングアウトしていますか?」という設問に対する当事者の学生の回答では、約半数(48%)の人たちが当事者以外の人にカミングアウトしていない結果であった(飯塚 2015)。

5) レインボーの色にデザインした関学レインボーウィークのステッカー(シール)のこと。日常的にカミングアウトすること自体、高いリスクである社会的前提があるため、マジョリティ側から(可視的に)働きかける必要があるという視点のもと考案された。

6) 「支持する」というのは適切な表現ではないかもしれないが、ここでは属性に対する忌避感がないといった意味である。

あるからこそ、本来とは異なる意味をもち、逆に貼りづらい状況を招くのではないか、例えば、万一広く普及した場合、「なぜ貼らないのか」という逆の意味での抑圧的な作用が働くのではないかという指摘である。他にも、イベント自体を盛大にすることは、パフォーマンスとしては一定の意義があるのだが、逆にクローゼットの当事者にとっては、それを大々的に扱うことで、「巷で噂になること」「それを意識させられること」などの危険をはらむ行為に繋がるのではないかという問題提起である。つまり、“イベント”として行うのでは一過性のものにすぎず、効果が薄い場合がある。それよりか、男女別の書類、更衣室、トイレなどより設備的な改善に取り組む方が重要ではないか。特にここで問題に挙げられたのは、「風土を変える」ことに特化し続けると、クローゼットへの当事者への負担や、マジョリティ側の反発や排除を強めることになりかねないのではないかという危惧もある。

確かに、2014 年から行うアンケートにおいても、「レインボーウィークを続けてほしい」などの肯定的な当事者の意見もあれば、「あまり盛大にしないほしい」「そっとしておいてほしい」という否定的な意見も見受けられる（飯塚 2015）。

対象者をどうするか、どのようなプログラムとして展開していくかということも、「風土を変えていく」というアプローチと、「設備を変えていく」というアプローチとともに、どのようにバランスをとるかによって、運動の展開の仕方も変わってくる。

しかし、同性愛者の直面する課題は、男女別しかないため利用できないといったような設備的な問題は薄い。どちらかという、隠すこと（公にすること）に気疲れする、ハラスメントを受けるといったような属性を理由とする偏見やコミュニケーション上でのトラブルである。それらを共有できる場も少ない。加えて、同じセクシュアリティであっても、立場によって全く課題が異なる。特に上記のようなコミュニケーション上のトラブルは文脈依存的であり、どのような境遇で、どのような立場をとるかによって、直面する課題は多様であり、画一的な解消方法を提示することは難しい。自身が研究する聴覚障害においても、似たようなことがいえる。生い立ちや失聴時期、残聴力によってコミュニケーション方法がまちまちのため、情報保障も恒常的に画一的な整備は比較的難しい⁷⁾。そのため、レインボーウィークは性的マイノリティを包括的に捉えているため、お互いに共有されるような課題について手探りにひとつひとつ取り組んでいる状況である。

またこの性的マイノリティは、外見から判断が難しいほか、家系的なものではない（個別的）、「自分へのカミングアウト」という言葉があるほど自己を見つめ返す経緯（再帰性が高い）、トランスジェンダーに至っては医学的処置を行う場合がある（身体性が強い）などの傾向や特徴もある。

関学レインボーウィークが政策として進んでいくなかでも、互いのパワーバランスを保ちつつ、取り組みは“可視化され対策ができるもの”であり、性的マイノリティの属性から直面す

7) 例えば、手話通訳を設置すれば手話ユーザーのみの不利益の解消になりうるが、字幕や文字による保障においても、手話ユーザーの不利益の解消にはつながりにくい、情報は更新されていくため、恒常的な整備に人件費がかかるなど。

る日常的な課題を“十全に”解消するものではない⁸⁾。時に「関学は性的マイノリティに対して先駆的な取り組みをしている」と評価される一方、「性的マイノリティがすごしやすい（課題が解消されている）キャンパスである」とイコールではない。各々で異なる課題は個別的に回収していくが必要になってきており、展開する上で、そのような視点も同時に考えていかなければならない。



写真 関学レインボーウィーク風景
(関学レインボーウィークのツイッター@kg_rainbowweek より)

【参考文献】

- 阿部潔, 2014, 「〈動向〉『当事者』たちの『声』から見えてきた人権教育の課題」『関西学院大学人権研究』18, 15-19.
- 阿部潔, 2015, 「〈動向〉第二回関学レインボーウィーク『もっとカラフルな関学に!』を振り返って」『関西学院大学人権研究』19, 57-59.
- 飯塚諒, 2015, 『関西学院大学 LGBT ウェブ調査報告書～性的マイノリティをめぐる学生・教職員の声～』関西学院大学人権教育研究室.
- 小林和香・飯塚諒・武田丈・北山雅博, 2016, 「関学レインボーウィークが提示する LGBT 施策のあり方」『関西学院大学人権研究』20, 33-41.

8) しかし、関学レインボーウィークを学院として開催することは、「風土を変える」というアプローチにおいて、現時点で効果的な方法であると考えている。